

# 『椿説弓張月』源為朝伝

## —『参考保元物語』と『難太平記』との比較—

三十五回卒 鹿野 朋子

### 目次

#### 本論

第一章 『椿説弓張月』と『参考保元物語』との比較

第一節 引用箇所についての考察

第二節 創作されたと思われる箇所についての考察

第二章 『椿説弓張月』と『難太平記』との比較

第一節 引用箇所についての考察

第二節 創作されたと思われる箇所についての考察

第三章 作者馬琴の意図

#### 結論

#### 注

#### 参考文献

#### 序

『椿説弓張月』は、文化四年（1807）から文化八年（1811）までの四年間を費やして刊行された作品である。馬琴は、

寛政七年（1795）二十九歳の時に初めて読本『高尾船字文』たかおせせんじもんを手がけてから、嘉永元年（1848）八十二歳で亡くなる六年前、天保十三年（1842）七十六歳にいたるまでに、四十一の読本を記している。その中で『椿説弓張月』は十六番目の作品にあたり、他の読本が二巻と五巻・五冊と八冊が平均であるのに比べ、二十八巻・二十九冊という長編物語であり、文化十一年（1814）から天保十三年（1842）に刊行された『南総里見八犬伝』と共に、馬琴の読本としての代表作と言える。

前編にはじまり、後編・続編・拾遺編・残編に終るまでには、多くの人物が登場し、為朝を中心にその運命にかかわっていく。場面も、京都・九州・京都・伊豆大島・四国・九州・琉球というように目まぐるしく展開していく。このような膨大かつ複雑な内容でありながら、読む者に混乱を招かないのは、詳しい説明を補充したり内容を重複するなどして、理解しやすいように整理されているからであり、そこに、この物語を一つの大きな構想として捉えている馬

琴の姿が浮かびあがってくる。

『保元物語』によると、源為朝は『きりょうこと』から・つらたましる、誠にいかめしげなる』（巻上）武将であり、伊豆大島に流された後も『物を物ともせず、人を人ともせず』（巻下）振舞っていたが、やがて伊豆介狩野工藤茂光に攻められて大島で自害した、と記されている。

しかし、『椿説弓張月』の中の為朝は、武力だけではなく、智勇にも勝れ、琉球にまで生き延びてその徳を発揮している。

何故、馬琴は、為朝を琉球にまで生き延びさせ、活躍させたのだろうか。

為朝の事蹟を詳細に伝えたものとして『保元物語』の他に『参考保元物語』と『難太平記』があると言われているが、馬琴は果してこれらの先行作品をどのように引用し、創作していったのであろうか。『椿説弓張月』と『参考保元物語』、『難太平記』とがどのようにかわっているのかを比較し、馬琴の意図する為朝像をさぐっていききたい。尚、テキストとして、日本古典文学大系『椿説弓張月・上』『椿説弓張月・下』（後藤丹治校注・岩波書店刊行）、『参考保元平治物語』（図書刊行会）、『群書類従巻三三九十八 難太平記』（東京統群書類従完成会）、を用いた。

## 本論

### 第一章 『椿説弓張月』と『難太平記』との比較

#### 第一節 引用箇所についての考察

第一節では、『椿説弓張月』と『参考保元物語』とを比較し、『椿説弓張月』が、『参考保元物語』から引用したと思われる箇所を抜き出し、考察を進めていく。

考察の結果、特にその引用箇所が多いのが保元の乱に関する事と、大島での茂光の軍との戦いに関する事である、ということがわかる。

馬琴は、『椿説弓張月』後篇備考において為朝を次のように評している。即ち、父為義のために上洛したのは『孝』であり、保元の乱で敵方にまわった兄義朝を射殺さなかったのは『義』であり『悌』である、と。更に、大島に流された後も院に対する忠誠心を変えなかったのは『忠』である、と記している。

馬琴は、このような徳をもつ為朝の姿を強調するために、二つの戦いでの為朝の活躍ぶりを、『参考保元物語』からそのまま引用したのであろう。

#### 第二節 創作されたと思われる箇所についての考察

第二節では、第一節をふまえた上で、創作されたと思われる箇所を五つに分ける。そして、1〔為朝が九州へ下った原因〕、2〔為朝が再び上洛する理由〕、3〔保元の乱の後、為朝が捕えられる経緯〕、4〔為朝が鬼が島に渡る事〕、5〔為朝が大島で戦った後のこと〕、という見出しをつける。考察

については、第三章で記すため、ここでは省く。

## 第二章 『樞説弓張月』と『難太平記』との比較

### 第一節 引用箇所についての考察

第一節では、『樞説弓張月』が、『難太平記』から引用したと思われる箇所についての考察を進めていく。

その結果、『難太平記』の義包が本当は為朝の子である、という内容をふまえて、『樞説弓張月』の朝稚(義包)が登場していることがわかる。

### 第二節 創作されたと思われる箇所についての考察

第二節では、『難太平記』をもとに創作されたと思われる箇所について、1「足利尊氏が天下を統一することができたわけ」、2「今川了俊が見た書について」という見出しをつける。考察については、第三章で記すため、ここでは省略する。

## 第三章 作者馬琴の意図

第一章では『参考保元物語』を、第二章では『難太平記』を取り上げ、それぞれ『樞説弓張月』との比較を行ない、引用箇所、創作されたと思われる箇所について、節に分け、考察を進めてきた。

第三章では、先の比較、考察から得られたものをまとめ直し、作者馬琴の意図をさぐっていく。

まず、第一章第一節では、『樞説弓張月』が、『参考保

元物語』から特に多く引用している箇所について述べた。

保元の乱に関する事と、大島での茂光の軍との戦いに関する事である。保元の乱に関する事は、『樞説弓張月』の八回Vにおいて、その発端から結末までの経緯が、全般に記されている。これは、『参考保元物語』の内容を集約した形になっている。特に、保元の乱での為朝の活躍ぶりは、『参考保元物語』からそのまま引用されており、為朝の勇敢な武将姿を強調している。大島での茂光の軍との戦いに関する事は、為朝が自分の生涯を振り返っているところ、大鎧で船の腹を射るところが、『参考保元物語』からそのまま抜き出された形になっている。保元の乱、大島での戦い、という為朝が活躍する二つの戦いの場面において、その内容を『参考保元物語』からそのまま抜き出して『樞説弓張月』に引用することによって、為朝が弓勢だけでなく、智勇に勝れた武将である、ということ述べたかったものと思われる。

第一章第二節では、『樞説弓張月』において、『参考保元物語』をふまえて創作されたと思われる箇所について、五つに分け、考察をした。1「為朝が九州へ下った原因」、2「為朝が再び上洛する理由」については、『参考保元物語』において、為朝自身の行ないが原因になっているのに対し、『樞説弓張月』では、信西の仕業になっている。

3「保元の乱の後、為朝が捕えられる経緯」については、『参考保元物語』で或者とだけしか記されていないのに対し、『樞説弓張月』では、武藤太の訴えによる、と記して

いる。信西も武藤太も『樗説弓張月』の中で、人々からひどく憎まれる人物として描かれている。馬琴は、この二人と為朝とを対照させることによって、為朝の実直で、人々から慕われる人柄を強調したかったと思われる。4 「鬼が島に渡る事」について、『参考保元物語』では、鬼が島の男たちを大鎗の威力を見せつけることによって従わせている。これに対し、『樗説弓張月』では、まず自分が手本となって女護島の女たちを悟らせており、鬼が島の男たちについても、東の七郎三郎（鬼夜叉）という忠義を心得た人物を登場させることによって人々を諭す、という方法をとっている。即ち、武力による強制的な方法ではなく、島の人々が自ら悟るように行動し、治める、という方法をとっている。馬琴は、為朝が、力だけでなく、人々を思いやる心の持ち主であることを描きたいためにこのような創作をしたのであろう。5 「為朝が大島で戦った後のこと」について、『参考保元物語』では、為朝は大島で自害しているこれに対し、『樗説弓張月』では、琉球にまで生き延びている。為朝が、自らすすんで落ち延びるような人物ではないので、馬琴は、忠臣鬼夜叉を使って、為朝が船に乗るよう仕向けている。為朝を、このまま大島で自害させるにはあまりにも惜しい人物だと、馬琴は思ったのであろう。諏訪春雄氏は、「不遇に死んだ英雄為朝を、保元の乱後も生き延びさせ、伊豆、琉球の地に驚天動地の活躍をさせることによって、史実の不完全を想像の生の理想によって補完する」と述べられているように、馬琴は、為朝の周囲の

人々を動かすことによって、為朝に琉球という活躍の場を与えたのであろう。英雄為朝が、その不遇な運命故に滅んでいくのを良しとせず、空想という許された自由な世界の中で、為朝を理想的英雄として称え、活躍させたのである。

第二章第一節では、『樗説弓張月』が『難太平記』から引用したと思われる箇所について考察をした。先に述べたように、『難太平記』の「義包が誠は為朝の子である」という箇所が、『樗説弓張月』に引用されている。義包は、足利義康の養子になり、その家督を継いだ後も、為朝の子であることを隠し通している。そうすることが、養父義康への孝行であり、実父為朝の、養父義康に対する義理も立つからである。が、馬琴は、更に深い意味を持たせていると思われる。それは、義包が、為朝の子であることを自分一人の胸に秘めることによって、ますます実父為朝に対する思いが深くなり、為朝の子だという自覚が強くなっていくことである。この義包の思いが、第二節に大きくかかわっていく。

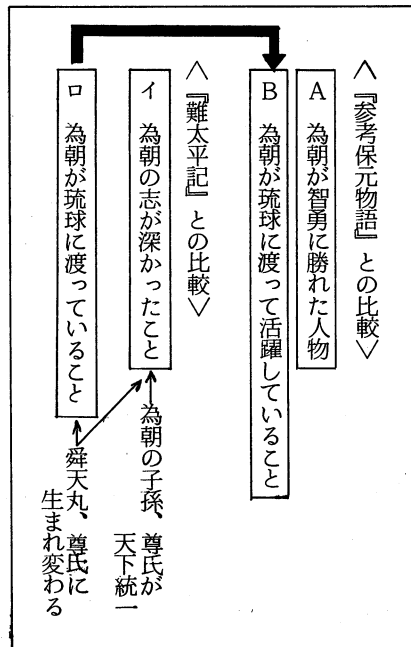
第二章第二節では、『難太平記』との比較において、創作されたと思われる箇所についてまとめた。1 「足利尊氏が天下を統一することができたわけ」について、『難太平記』では義家の願いがかなったため、と記しているが、『樗説弓張月』では、舜天丸の意志、即ち為朝の志がかなったため、と記している。舜天丸は、父為朝の志が深かったことを知り、子孫の尊氏に生まれ変わって、その願いをかなえたのである。馬琴は、為朝の志が、嫡男舜天丸に受け

継がれ、後世の尊氏に及ぶほど、深いものであった、ということ強調するために、このような創作をしたものと思われる。? 「今川了俊が見た書について」は、『難太平記』で、義家の置文、と記されているのに対し、『椿説弓張月』では、為朝の一代記、と記されている。その一代記とは、義包が嫡男義氏に自分の見た夢を語り、密かに書かせたものである。為朝の一生を夢に見るほど、義包の為朝に対する思いが深かったことがうかがわれる。馬琴は、今川了俊が見た書を為朝の一代記である、と創作することによって、足利義包が為朝の子であり、足利尊氏が為朝の子孫であることを強調したかったものと思われる。そして、為朝が忠義に厚く、天下統一の願いを持っていて、ということを書いたことがなかったのであろう。

以上、『難太平記』との比較から、為朝の志が、後世に及ぶほど深く、素晴らしいものであった、ということが言える。更に、馬琴は、もう一つ重要な意味を、その創作の中に込めている。それは、為朝が琉球に渡った、ということである。舜天丸は、琉球に渡る以前は、母白縫と二人、木綿山の隠れ家で、紀平治一人を供に置くだけの静かな生活を送り、その存在を世に憚っていた。わずかに六歳の舜天丸には、父為朝の志を理解するほどの時間も、自覚もなかったものである。よって、舜天丸が、為朝の志を理解し、それを自分が後世に生まれ変わって実現させようと思うまでは、父と子が一緒に生活する琉球での歳月があったことが想像される。馬琴は、舜天丸のことを述べながら、暗に

為朝が琉球に渡った、ということを書いているのである。第一章、第二章において、それぞれ馬琴の意図することをまとめ、図1に示してみた。

図1



『参考保元物語』との比較から、為朝が智勇に勝れた人物として描かれていること、それ故、琉球にまで渡らせて活躍させた、という馬琴の意図がわかる。『難太平記』との比較から、尊氏が天下を統一することができたのは、為朝の志が深かったからだ、ということ、また、舜天丸が尊氏に生まれ変わることからも、為朝の志が深かった、と言うことができる。そして、為朝が琉球に渡ったことも馬琴の意図するところである。

図1からもわかるように、為朝が琉球に渡ったという創

作は、『参考保元物語』との比較においても、『難太平記』との比較においてもなされている。即ち、舜天丸が尊氏に生まれ変わる、という『難太平記』での創作は、『参考保元物語』での創作も裏付けている。

馬琴は、当時布教されていた儒教の思想を重んじ、その思想が説くところの『仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌』という八つの徳を強調した。よって、前田愛氏(前田)が、為朝のことを「儒教的な諸徳目を兼ねそなえた理想的英雄」と評しておられるように、馬琴の描いた為朝は、武芸に勝れ、更に諸々の徳をも所有した英雄とすることが出来る。馬琴は、その徳を存分に發揮させるために、『椿説弓張月』という大きな舞台を為朝に与えたのである。悲運の英雄為朝を、智勇に勝れた人物としてよみがえらせ、活躍させることよって、為朝に対する馬琴の、そして当時の人々の同情や関心を満足させることができたのである。

### 結論

当時、寛政の改革によって、儒教思想が重んじられることになったが、馬琴は、いち早く時代の流れを感じとり、その思想を取り入れたところの史伝物の読本制作に力をそそいだ。その結果、黄表紙や洒落本においては、師範であり、競争相手でもあった山東京伝の優位に立つことができ。馬琴は、儒教思想が説くところの諸徳「仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌」を、為朝の行動の一つ一つにあてはめ、為朝の一代記として『椿説弓張月』を記している。

馬琴の意図した為朝像を捉えるために、為朝の事蹟を詳細に伝えていると言われている『参考保元物語』と『難太平記』とを取り上げ、『椿説弓張月』と比較し、考察を進めてきた。馬琴は、為朝を、武芸のみ勝れた武将ではなく、智勇を兼ねそなえ、諸々の徳を發揮する人間味あふれた人物として描いている。その為朝像が、終始一貫して描かれているため、『椿説弓張月』という長編を、一つの大きな構想として捉えることができる。

英雄が、不幸な運命故に早くして滅びる、という不公平を解消し、大いに活躍させるという馬琴の勸善懲惡主義は、人々の関心をとらえ、満足させたのである。

馬琴は、武家の出身であるが、父も兄も、そして馬琴自身も、武士として立身出世できなかったという経緯をたどっている。即ち、現実の武家生活と、彼の描く武士世界には、格段の差があったわけである。『椿説弓張月』は、馬琴の、武家社会に対するあこがれであり称讃の現われなのである。馬琴は、『椿説弓張月』の為朝を、馬琴自身の理想像として描いたのである。

### 注

1. 『参考保元物語』三卷九冊考証。今井弘済・内藤貞顕考訂。元禄二年(1689)成立。同六年刊行。『参考平治物語』と合刻。徳川光圀の命による水戸藩の修史事業の一つ。

### △内容▽

保元物語の版本を底本とし、京師本・杉原本・鎌倉本・

半井本・岡崎本の五異本を対校として異同を示す。

〔翻刻〕

『参考保元平治物語』（図書刊行会 大正3年）

2. 『難太平記』室町前期の史書一巻。今川了俊（貞世）著。応永九年（402）成立。今川氏の家系、歴史、功績などを子孫のために書き残したものである。

文中、『太平記』の誤謬を指摘し、反対訂正している箇所が多い。

3. 後藤丹治氏は、『日本古典文学大系・椿説弓張月・上』

（岩波書店刊行）の解説において、次のように記されている。「『保元物語』は、一面、為朝武勇伝たるの観があるが、弓張月は、その為朝武勇伝的な保元物語の意義を独立強調したものと見えるであろう。ただし、この『保元物語』には、元禄時代、水戸の彰考館で編纂刊行した『参考保元物語』があるので、馬琴は、専らこの『参考保元物語』を採用している（中略）ことに馬琴は、今川了俊の『難太平記』の説にもとづき、下野の足利義兼を為朝の実子とし、この義兼の子孫に足利尊氏があって、遂に天下を統一し、日本全国の武士の総帥となったが、これも為朝の徳の致すところだとしているのである。すなわち、為朝は、伊豆の大島で死んだのではなく、琉球にわたってその内乱を鎮め、大いに威徳を發揮し、その子は、琉球国王となった、と作ったのであるが、更にその上に為朝の何代か後の子孫が全国を一統したとまでしているものであり、これも『保元物語』には全く現われていないもの

である。』

水野稔氏は『秋成・馬琴』鑑賞日本古典文学第35巻（角川書店）において、次のように記されている。「『保元物語』『難太平記』等によって、史実を重んじている」

藤村作氏は、『馬琴』日本文学研究資料刊行会編（有精堂）において、次のように記されている。「以上の説話は『保元物語』『難太平記』等に多少拠る所はあろう」

4. 「スペースドラマと馬琴の世界」諏訪春雄

（国文学 解釈と鑑賞 574 12月至文堂）

5. 滝沢馬琴『椿説弓張月』前田愛

（国文学 第19巻 1-4号 1974年3月臨時増刊号）

参考文献

・日本古典文学大系『保元物語平治物語』

（永積安明 島田勇雄校注・岩波書店刊行）

・かたりべ草子四『木下順二が語る保元物語』（平凡社）

・人物叢書『今川了俊』川添昭二著

（日本歴史学会編集 古川弘文館発行）

・日本文学研究資料叢書『馬琴』

（日本文学研究資料刊行会編 有精堂）

・『秋成・馬琴』鑑賞日本古典文学第35巻

（中村幸彦・水野稔編 角川書店）

・「馬琴と弓張月のこと」松島栄一『日本古典文学大系月報16』（昭和33年8月 岩波書店）

・「馬琴と南北・異界へのワープ」（国文学第31巻2号）

昭和61年2月)

。 「馬琴文学の形成」 水野稔

(文学 1968年3月 VOL.36 岩波書店)

。 国文学 第19卷 114号 1974年3月臨時増刊号

。 国文学 第20卷 116号 1975年11月臨時増刊号